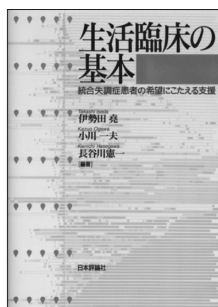


■ 書 評



生活臨床の基本 —統合失調症患者の希望に こたえる支援—

伊勢田堯、小川一夫、
長谷川憲一 編著
日本評論社 2012年3月
240頁、定価 2,940円

“生活臨床学”（“統合失調症の保健・医療・福祉学”）の源流は、1958年に遡れる。すなわち、本書は五十年の悲願の総括書である。「生活臨床」の集大成でもあり、向後の「生活臨床」のさらなる成長課題の提唱でもある。この「生活臨床」理論とその臨床応用とは、半世紀を超えても、脈々と、そう、脈々と継承され続けているのである。俗に言えば、それは「土着精神医学」ないしは「庶民精神医療」でもある。徹底した現場主義が最優先され、患者の生活場面における様々な事実や変化を唯一のエビデンスとして捉える。その上で、これらのエビデンスにメスを入れて考え抜き、患者の“失調”を科学するのである。

大言壮語でなく、後述は世界の地域精神医療の先駆けとも言い得るし、まさに“挑戦”でもあった。それ、すなわち「生活臨床」は、群馬大学医学部神経精神医学教室の、当時の教室の大志溢れるスタッフが、情熱の限りを結集して開始した「統合失調症再発予防5カ年計画」に、その端を発する。考えてみれば、それはまだ、私が僅か4歳の時でもあった。当時はまだ、やっとな薬物療法が導入されたばかりであった頃であるし、はたまた、隔離収容中心主義の精神医療の時代であった筈でもあろうに、彼らはすでに地域包括支援システムも念頭に据えて、病棟の完全開放化や地域の保健師その他の多職種とともに、当事者およびその家族のサポートシステムの構築に邁進した。

ところで私の実臨床の恩師は、この群大で「生活臨床」を学ばれた佐藤勝先生（くじら病院院長、愛媛県）である。佐藤先生に連れられて群大を見学させていただいた思い出は忘れようもない。本書の編著者の先生方などが研究室に総出で“情熱軍団”と化し、凜と張り詰めた空気の中で、真剣に討論されていた。それはまさに長期予後の分析検討の真っ只中なのであった。あの喧騒と熱気とに、私は強烈に圧

倒されたのであった。

泥臭いほどの内容が、本書の随所に登場する。たとえば統合失調症の「生活臨床」の意義や臨床現場でのその応用のノウハウに始まり、早期介入や就労支援、結婚支援あるいはデイケア場面での活用方法などが網羅され、患者さんの生活やその変化を最重要視し、それらへの対応法を記載している。余談ながら、私はこの「生活臨床」を、統合失調症に拘泥することなく、大抵の精神疾患にも秘かに援用しているのであるが、本書を読んで、さらにその秘かな意を強くした。

さて本書の第6章の「生活臨床の結婚支援」には、こうした本人・家族の要望に応じて、担当医は群馬大学の生活臨床研究室に結婚希望者の写真・履歴書を掲示し「公募していた」とあり、「依頼により筆者の1人が仲人を引き受けることになった」と記載されている。先の恩師からは何度か訊いていた“神話”であったが、やはり“情熱軍団”の熱意には脱帽である。

また本書の第7章の「生活臨床におけるデイケアの役割」には、現在の精神科デイケアの在り方を痛烈かつ堂々と、冷静に批判している。それは「……個々のデイケア利用者がどんなニーズを持っているかということと、グループの活動が乖離してしまっている……」いて、「……デイケアに通うだけ」のケアしか受けていない精神障害者は今も多い、と明言している部分に象徴されている。この考え方に、私は正に同感なのであって、この「通うだけ」のケアは昨今の精神科デイケアに限らず、認知症などの高齢者を通所対象としているデイサービスにおいても、同様であるように思う。主治医からの通所目的欄には、「規則正しい生活の確立」といった程度のことしか記載されていないのである。患者さんたちどころか、デイケア・サービスのスタッフにしてみれば、これでは堪らない。担当主治医がデイケアの意義を知らないと、この程度の「通所目的」しか書けないのである。もっと言えば、担当医の臨床能力全体がはっきりするのである。本章には、生活臨床の視点からのデイケアの在り方だけに止まらず、もっとマクロの視野から、デイケアの意義とスタッフの機能の在り方、そしてそれらの底流の神髄が見事に記載されている。

最後に、本書はすべての保健・医療・福祉関連の実践家スタッフにとどまらず、これからこれらの分野での活躍を目指す学生その他のみなさんに、是非ご一読いただきたい。読み応え十分の絶品である。

（堀口 淳）